

「不登校」を問い直す

荒井 英治郎 (信州大学学術研究院総合人間科学系)

1. はじめに

本稿は、2020年度に開講した教職科目(選択)「現代社会と教育問題」(2020年12月15日)の授業にオンラインゲストとしてご参加いただいたゲストティーチャー(西森尚己氏:子どもの支援・相談スペース「はぐルッポ」代表)の講演内容を再構成したものである。記録作成に当たっては、本学の学生である塚田英莉さんに尽力いただいた。記して感謝を申し上げたい。

2. ゲストティーチャーの話

(1) 自己紹介

【ゲスト】西森尚己と申します。今回「不登校を問い直す」ということで、お話をさせていただきますが、「問い直す」というのはとても難しいことだと思いますので、皆さんと一緒に考えていけたらと思います。

私は薬剤師の傍ら、松本市で不登校の子どもたちの居場所である「はぐルッポ」というところで、子どもたちのサポートをしています。お話をする前に皆さんにお聞きしたいことがあるのですが、皆さんの中に不登校だった方はいますか。不登校ではなかったけれども、学校行くのが嫌だった方はいますか。不登校ではなかったけれども、誰かを不登校にさせてしまった方はいますか。後にそういったことも含めてお話を一緒に

していきたいと思っています。それでは、よろしく申し上げます。

(2) 不登校の現状について

【ゲスト】不登校の定義は、文部科学省の場で『不登校児童生徒』とは『何らかの心理的、情緒的、身体的あるいは社会的要因・背景により、登校しないあるいはしたくともできない状況にあるために年間30日以上欠席した者のうち、病気や経済的な理由による者を除いた者』と定義されています。そのため不登校の症状と思われる腹痛や頭痛などの欠席は含まれず、病欠とカウントされていることが多いです。

続いて文部科学省が毎年出している「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の

諸課題に関する調査」に注目してみましょう。この調査は毎年その前年度のものが秋頃に発表されます。これを見ていただくと、特に7年前くらいから不登校の児童生徒の増加は著しいです。小学校から中学校にあがるにつれ増えていき、中学3年生の不登校の生徒数が一番多くなっています。全国の中学生は2019年度は325万人と言われていますが、不登校生徒は全国の中学生の3.94%、すなわち、113万人で、25人に1人は不登校であるということを示しています。

ここで気を付けなければならないのは、不登校生徒としてはカウントされていない子どもたちがいることです。「登校しても教室に入れず保健室や相談室にいる子ども」、「朝や放課後出席にするために登校する子ども」、「登校して担任とハイタッチだけして帰る子ども」といった「不登校傾向の子ども」は文部科学省の調査の中では入っていないのです。

そんな中、日本財団が2018年に不登校傾向にある子どもの実態調査を行いました。

不登校傾向にある中学生（年間欠席数は30日未満）はなかなか登校できずにいたり、連続して学校を休んだりしている子どもで、学校の校門までは行ける、図書館や校長室には行けるが教室には入れない、教室で過ごしてはいるが、授業に参加する時間が少ない、また心の中では学校に通いたくないと感じているという子どもたちが対象になります。

その調査によると、不登校傾向にある中学生は、全中学生325万人の10.2%にあたる約33万人にのぼることがわかりました。この数は文部科学省が調査した不登校の中学生の数の3倍にあたり、約10人に1人が

不登校傾向にあることが初めて明らかになったのです。

その他にも、中学校に行きたくない理由については、「授業がよくわからない」、「成績が取れない」、「テストを受けたくない」という学習面に関する理由がありました。また、学びたいという環境については、「自分の好きなことを突き詰めることができる」場所、「自分の学習のペースにあった手助けがある」場所、「常に新しいことが学べる」場所という意見がありました。

この調査の良いところは、子どもたち本人に聞いているということです。文部科学省の調査は、学校、教育委員会による回答をまとめたもので、子どもたち自身の心や意見が正しく反映されていない面もあるように思われます。このような不登校傾向にある子どもと不登校の子どもに合わせると約43万人に上り、それは増え続けているのです。

(3) 「はぐルッポ」の子どもたち

【ゲスト】ここからは今話してきた不登校の子どもや不登校傾向にある子どもが来ているはぐルッポについて話していきます。

はぐルッポという名前は、「Hugする」「育む」「グループ」という意味の造語です。グループはイタリア語でグループという意味。Hugするグループであるという思いがこもっています。

はぐルッポは様々な理由で学校に行くことができず、登校しても苦しい思いをしている子どもたちの居場所になっています。また悩みを抱える保護者の相談の場所にもなっています。2013年に立ち上げて今年で8年目になります。当初はこの居場所につい

てあまりよく思わない人もいて、かなりの批判がありました。特に学校からは非常に強い批判や反感があり、なかなか理解されませんでした。

それは、はぐルッポが「学校復帰」を目的としてはいないからです。子どもたちがありのままの自分であることができる、ただ居ていい場所として私たちはこの居場所を作りました。子どもたちは何もしていないことも保証されながら、好きなことをして過ごし、自分で考え自分で決めて動き始める。はぐルッポはそれを待っている場所と考えていただけたらと思います。

それに対して、「そんなに甘やかしているのか」、「楽しいことばかりしていたら学校へ戻らなくなる」、「厳しく躾をしなければならぬ」、「我慢することを覚えさせなければいけない」と言われることもありました。これは学校からも、そして、保護者の方からも言われたことがあります。そういったことが理由で、はぐルッポは批判を受けたのではないかと思います。

私たちは子どもが自分を取り戻して、自分で考えて自分で決めてその一歩を踏み出すためのエネルギーを育むお手伝いをしたいと考えています。子どもが、誰もがありのままの自分でいられて、言いたいことが言え、安心して何度でも失敗できる、何もしないで居ることもできる、そんな場所であり続けたいと考えています。

はぐルッポに来る子どもたちはみんな学校に行けないことに負い目を感じていて、自分は駄目だと思い、自己肯定感が低い子どもが多いです。保護者の方も自分の子には将来はないのではないかと、自分の育て方が間違っていたのではないかと悩み、周囲にも

そう思われているような気がして周囲の目が気になり子ども以上に苦しんでいる場合が多いです。

子どもたちははぐルッポに来ると、自分でやることを決めて自由に過ごしています。学校のように時間割があつて勉強し、決められたことをやらなければいけないということはないです。ゲームをしたり体育館でバドミントンをしたり、時にはボルダリングに行ったりもします。寝ていても勉強していてもいいのです。はぐルッポでは何をしても何もしていなくてもいいというスタイルでいます。私たちは子どものやりたいことをそのまま形にしたいと考えています。

そんな子どもたちがはぐルッポに来て、自分の好き勝手にしているうちに多くの子どもたちはエネルギーをためて元気になっていきます。そのような例を紹介していきたいと思います。

ある小学4年生の女の子は、「私悪い子でいいの」と言いました。その子は学校が怖いと言って不登校になりました。この子はHSC (Highly Sensitive Child : とても感受性が強い子ども)の傾向がありました。しかし好きなことを自由に行っているうちに、大きな声も出るようになり、仲間もできて、男子に暴言を吐いてふざけ合うくらいになりました。スタッフがその暴言を言い過ぎではないかという、「うちでは絶対言わないよ、怒られるから」、「私ははぐルッポでは悪い子でいいの」と言って、笑って逃げて行きました。はぐルッポではいい子であるのではなく、ありのままの自分でいられると言うのです。暴言などに関してスタッフの中では、ルールを決めた方がいいのではないかと

う意見も出ました。しかしはぐルッポは悪い子でも居られる場所であり、そのような空間があってもいいのではないかと最終的に話がまとまりました。この子は元気になり、今は学校に行っています。

次はある小学校6年生の男の子のお話です。クラスから浮いてしまい、友だちとうまくいかなくなったことが原因で不登校になりました。彼ははぐルッポに来ると、ひたすらゲームをしていました。そのうち、ただ、ゲームに熱中しているだけでなく、ゲームをしながらもスタッフや友だちの話を聞いていて話に割り込んだり、周囲とはつながるようになってきました。半年ほどひたすらゲームをやり続けたある日、彼は「ちょっと学校行ってみる」と言い、学校へ行き始めました。今は登校しても疲れて辛くなったら自分でバランスをとって休むことができるようになったようです。

ある中学生の女子は「お母さんが嫌いだから家に帰りたくない」と言いました。小学生の頃のいじめで不登校になったそうです。彼女は得意なことがあってその能力を發揮できるのですが、自己肯定感が低く自傷行為を繰り返していました。はぐルッポに来るようになって元気になってくると、学校へ行きたい、友だちと遊びに行きたいなど、外の世界に一步踏み出そうと考え始めました。すると、自身も中学の頃にいじめにあっていた母親は、娘が外でまたいじめられるのではないかと心配のあまり、またいじめられたらどうするの?と問いながら娘の行動を制限してしまっています。そのため彼女は元気になったり、フラッシュバックしたりということを繰り返しています。

ある中学生の男子は幼い頃から有名進学

校に行くとは皆に期待されていた子です。彼は、成績が落ち、もう駄目だと心が折れてしまい、不登校になりました。「僕は生きていく意味がない」と、毎日母に訴えていました。半年近く彼は他のことは何もせず、はぐルッポの前の川でただ、好きな魚釣りを3時間も4時間もしていました。彼はとても魚に詳しく、釣りがきっかけで年下の「子分」もでき、慕われていました。小学生と一緒に釣りをしたり話をしたり、だんだん自信を取り戻してきた彼は、やはり高校へ行きたいと考え始めました。そして時々学校へも行くようになり高校へ進学し、今では大学で、自分と同じような子の力になりたいとカウンセラーを目指しています。

ある中学生の男子は発達障がいであることをいじめられ不登校になりました。「ガイジ、ガイジ」(障がい児)と言われ追いかけられたり、靴に画鋏を入れられたりと、ひどいいじめでしたが、お母さんは学校だけ行った方がいいと言って学校に引きずるように連れて行っていました。そのうちにどうしても学校に行けなくなり、カーテンを閉めて部屋にこもって、食事もほとんど取らず痩せてきました。お母さんが声をかけると物を投げたり暴力を振るうようになり、母と一緒に死のうとまで考えたと話しました。そして、はぐルッポに相談に来ました。その時、彼は「中学卒業したらどうするの?」という私の問いに、「僕死ぬからいい」と答えました。それに対して、私が嫌だったら学校に行かなければいいのではないかと話したら、彼らは驚いていました。学校へ行かないという選択肢は考えなかったようです。彼は曲を聞いただけでピアノを弾けたり、見ただけで10桁の数字を覚えられたり、非

「不登校」を問い直す

常に記憶力に長けていました。スタッフに話を聞いてもらったり、パソコンやゲームなど好きなことしているうちに高校へ行きたくなり、Web 関係を学べる高校へ進学しました。そして目標ができ、独学で勉強し国立大学に合格しました。

このように大人が子どもの現在をそのままいいと認め、そして粘り強く待つことで子どもは自分の力で変わっていきます。信州大学の子どものこころ診療部の本田先生は、「子どもが学校へ行きたくないと言った時にはもう最終段階。頑張れなんて言うのは、フルマラソンを走ってきた後にさらにダッシュせよと言っているようなものだ」とおっしゃいました。そんな状態の子どもには休息できるような居場所が必要だと思っています。自由に何でもでき、その場は安心できる場所でなければいけないと考えています。そこでは不登校であることを否定されない、不登校である自分も否定されない、そして普通とか、常識とか、善し悪しではなくそのままいいよと認めてくれる、そんな場所でありたいと願っています。

(4) 不登校を問い直す

【ゲスト】不登校は依然として増え続けています。また一方でフリースクールや多様な学びの場ができてきていると思います。このような現状の中で国の不登校に対する考え方も変わりつつあり、2017年2月に「教育機会確保法（義務教育の段階における普通教育に相当する教育の機会の確保等に関する法律）」が制定されました。この第13条には、不登校の子どもたちに「学校外での学習活動の重要性」、「休養の必要性」と書いて

あるのです。そして2019年の10月には「不登校児童生徒への支援の在り方について」という通知が出ました。この通知では、支援の視点というところには『「学校に登校する」という結果のみを目標にするのではなく...』と記載されています。そして学校教育の意義・役割についてはフリースクールなどの民間施設やNPOと積極的に連携という文言があります。

このような視点から、学校以外にも多くの居場所や多様な学びの場が必要とされ、学校もまた在り方を根本から問い直さなければならぬと思います。このことはこれからの教育の非常に大きな課題であると考えています。

この法律ができて3年しか経っていないせいなのか、不登校は依然として増え続けていますし、この法律のせいで不登校が増えてきたとも言われています。しかしこの法律の趣旨が十分に生かされていないのではないかと思います。特に学校は変わっていないと感じています。学校復帰はあくまでも結果で目的ではありません。不登校支援とは学校に来ない子どもを学校に来させる方法を考えることではないのに、依然として学校は学校へ来させることを一番に考えていて、学校自身を変えていく取り組みがあまりないように感じてしまいます。

子どもが不登校になると学校や保護者は「なぜ」を追求します。いじめや、先生と合わない、家庭環境、発達障がいなど原因を推測し、そのせいにして対症療法を考えます。

けれど子どもたちの話を聞いていると、多くの子どもは「なんとなく学校が嫌だ」、「学校へ行くと疲れる」、「クラスの雰囲気嫌い」と曖昧な言い方をしています。どう

して不登校になったのか、学校行きたくないのかということは自分でもよく分からないことが多いです。おそらく本当のところはもっと複雑で、子どもたちにとって表現しにくいものだったのではないかと思います。日本財団の「中学校に行きたくない理由TOP10」においても、「朝起きられない」、「疲れる」が上位にきています。

私たちがはぐルッポで子どもたちと関わって一番感じていることは、いかに子どもたちは管理され、教育され、同調圧力の中で生きているのかということです。こうでなければいけない、こうすべきという中で生きている。それは学校だけではなく、家庭でも同じです。

大人は「子どものため」、「個々に寄り添う」と言いながら、普通や常識といった物差しを使って、子どもたちを世間の価値観で比べ評価しています。この「普通」という言葉に身体ごと違和感を覚えて、そのストレスにつぶれてしまう子はとても多いです。

西野博之さんは『居場所のちから一生きているだけですよ』(教育史料出版会, 2006) という本の中で、「子どもを制度や学校に合わせようとするのではなく、子ども自身の最善の利益を確保できるように、子どものいのちの側に制度や仕組みを引きよせて、変えていく」と言っています。これが一番重要なのではないかと思います。家庭も学校も教育行政も、そして「世の中」も、子どもを信じ子どもたちの心の声を聴きながら、大きく変わっていかねばいけないと思います。そして、これが不登校の子どもを含めすべての子どもたちにとって必要なことだと思います。

(5) 質疑応答

【学生】不登校傾向にある生徒に対して、どのような振る舞いをするべきでしょうか。

【ゲスト】学校で友だちや先生の意見を聞きながら、自分の意見を考えることはとても大事だと思います。しかし、はぐルッポの中には「学校は強制してくるから行きたくない」という子もいます。そういったことについていけない子もたくさんいるのではないかと思います。そういう子には、周りに合わせなければならないではなく、その子そのまま認めてあげることが必要だと思います。それが一番大事だと思います。

【ゲスト】ご自身はどのような振る舞いができると思いますか。

【学生】実際に中学校へ大学生として学習支援に行くと、「待つ」ということの大切さを感じています。それと同時に先生方の様子を見てみると、本当に忙しくされていて自分が教師になったときに「待つ」ということができるのかとってしまうことも事実です。

【ゲスト】時間に管理されているという空間だからできないことは多いと思います。それについていけない子もちろんいるので、そういう子どもたちを認めてその子に合う環境を作ることだと思います。できない場合にははぐルッポのような学校ではない居場所をうまく利用すればいいと思っています。学校の中だけで解決しようということが難しいのかもしれない。

「不登校」を問い直す

その子にとって一番いい方法を見つけていけるといいですね。

【学生】子どもにとって学校とはどのようなところだとお考えですか。そして、子どもの実態を知るためにはどのような方法がありますか。

【ゲスト】理想は子どもが選べる場所がたくさんあればいいなと思っています。学校に行くのが苦しいのに行く必要はないのではないかと思いますし、学校以外にも色々学べる場所があるということ世の中がもっと知って行ってほしいです。またイエナプランやシュタイナー教育などの様々な教育の形がありますが、子どもがそれを選べるようになったらいいなと思っています。子どもにとって学校とは、大勢の中で自分を作っていくところだと思いますが、そこに合うか合わないかも含め、自分に合う学びを探していくことが大事だと思います。

自分で考えて決断し行動できる、そして困ったときには助けを求めることができる子どもになってほしいと思います。そして学校がそういう場であってほしいとも思います。

【学生】保護者の方も苦しんでいるということについて、はぐルッポではどのように保護者の方とお話していますか。

【ゲスト】はぐルッポではまず保護者の方が来て、そのあと子どもと一緒にくるという場合が多いです。保護者の方には今の子どもの現在をそのままいいよと認めることが大事だと伝えていきます。話していると、

自分の家庭環境を含めた保護者の方ご自身の昔のことを話してくださる方もいて、そこからヒントを得ることもあります。それも含めて聞いていき、これからのことを一緒に考えていくようにしています。

【学生】はぐルッポの中で、スタッフはどのような関わりをしていますか。

【ゲスト】はぐルッポでは、子どもたちは好きなことをして遊んでいます。スタッフは子どもたちが助けを必要とした時に寄り添っていくという形をとっています。そのうちに子どもたちは心の内を明かしてくることがあるので、子どもが話し出してくるまで待っています。遊びの中から子どもたちが自分に気づいていくということを大切にしています。

【学生】学校ではキャリア教育がありますが、はぐルッポではどのように子どもたちの今後について考えていますか。

【ゲスト】動き出したいと思っている子どもに対しては情報を伝えることはあります。以前菓子屋さんで手伝いしてみたいという子に、お店でお菓子を入れる箱を作る手伝いなどを、職場体験のようなこともやっています。

はぐルッポでは高校卒業したあとのことについては子どもたちと関われなくなって悩んでいます。私たちにとっても課題だと思っています。

【学生】社会的自立の問題について、不登校支援と社会的自立の関わりについてどのよ

うにお考えですか。

【ゲスト】どの子にとっても社会的自立ができるようになればいいと願っていますが、その子が動き出すまで待とうと思っています。動き出したときには地域と連携したりして職場体験など紹介するなどしています。

【学生】社会的自立と社会貢献との関係については、どのようにお考えですか。

【ゲスト】自立して社会貢献できることは望ましいことと思います。しかし障がいのある人が社会的に自立して働くことはなかなか難しいこともあります。大事なのは、その人が生きていること自体が大事という考えでいたいと思います。

【学生】はぐルッポでは子どもたちがありのままにできることができ、何でもやっていいと言われると、暴言を吐くなどカオスで混沌としてしまうと思いますが、そのような時はどうしますか。

【ゲスト】はぐルッポの中でも排他的ないじめが起こることはあります。私たちも悩みながらやっています。基本的には子どもたちが子どもたちの中で解決できるということを基本に待っています。しかし謝って終わりではなく、子どもたちが納得して解決することが理想です。そんな中で子どもたちは変わってきていると思います。

【学生】校則と個人の自由はどのように調整していけばよいのでしょうか。

【ゲスト】校則については色々なところでお話があると思いますが、はぐルッポにはルールがありません。それは子どもたちが決めていければいいのであって、実際子どもたちの中で考えているのではないかと思います。学校でも子どもたちが決めていければいいと考えています。

【学生】利用者の中で、「この子は学校に行った方がいいのではないか」と思ったことはありますか。

【ゲスト】学校に行ったらとスタッフの方から言うことはほとんどありません。その子が動き出すのを待ちます。

【学生】はぐルッポの組織について教えてください。また他の学校とはどのように連携していますか。

【ゲスト】はぐルッポのスタッフは15人くらいです。日によって変わりますが、毎回4人くらいは入れるように組み合わせています。主婦の方や元教員など様々です。

学校とのつながりに関しては、最近は学校や病院の支援会議に呼ばれることが多くなりました。またはぐルッポは出席扱いになるので、出席状況を毎月学校にお知らせするようにしています。

【学生】学校への連絡はどのような形でしょうか。

【ゲスト】現在学校は、はぐルッポへ来たときは出席扱いになっています。教育委員会に報告して、それが学校に伝わる形になっ

「不登校」を問い直す

ています。支援会議等に呼ばれることもあります。

ぜひ、はぐルッポに遊びに来てください。実際に子どもたちと触れ合ってみて、感じてもらえることがあったらいいなと思います。